2024年8月 Vol. 30

星川だより

熊谷空襲を忘れない市民の会　会報

熊谷空襲戦跡めぐりに参加して

2024年6月1日に実施した戦跡めぐりに参加した高校生に感想を寄せていただきました。

石上寺岡安住職の説明を受ける参加者

①熊谷女子高校　歴史文化研究部の3名

○熊谷空襲戦跡巡りに参加するのは2回目で、初めて熊谷空襲を知ったのは昨年でした。一番印象的だったのは、自分が毎日通う熊谷女子高校の北門に戦跡があったことです。戦時のアメリカが使っていた、B-29爆撃機から落とされた焼夷弾による跡らしいのですが、身近に戦争を伝えるものがあることに驚きました。2度の戦跡巡りを経て、空襲の被害の大きさや悲惨さは、お話を伺い、この目で見て理解を深めることができました。しかし、この歴史を私自身に関係のあることと捉え、伝えていくのは難しいと思います。それでも、平和に生きるためにはどうすれば良いのか、戦争が起きないように具体的に何ができるか、この機会をきっかけに考えたいと思います。

○今回、戦跡巡りに参加させて頂いて、たった数十年前に私たちの身近な場所でこのような悲惨な出来事があったことを改めて実感する事が出来ました。熊谷空襲があったという事実は知っていましたが、どれほどの被害になったのか、何故熊谷が選ばれてしまったのかなどは知らなかったので、写真を見たり、実際に現地を訪れて説明を聞くことで、今まで習ってきた歴史の内容と繋げることができました。

また、私の通っている熊女も被害に遭ったことは知っていましたが、当時どういう施設として使われていたのかなどは知らなかったので、熊女のことをもっと知るきっかけにもなり、参加することが出来て嬉しかったです。今回学んだことは周りの人にも伝えていきたいと思いました。有意義な時間を過ごすことが出来ました。

○今回の熊谷空襲戦跡巡りに参加して戦争というものの悲惨さをより感じることができました。小学校、中学校で戦争が起き、たくさんの死傷者がでたり家を失った人がいたりしたというのは歴史として学びましたが、表やグラフで見てテストのために覚えていただけでした。しかし、今回実際に空襲の被害にあった場所に足を運んでそこで何が起こったかを聞いて、当時の人の苦しみや辛さのようなものを少しでも想像が出来た気がします。そして、最初の資料を用いた説明では同じ場所の空襲が起こる前と後の写真を見ましたが、空襲後は多くの建物が全壊、半壊していて、空襲はここまで景色を一変させてしまうのかと驚きました。また、私の住んでいる地域には平和資料館という施設があり、そこには熊谷空襲をはじめとした第二次世界大戦の際の物品や写真が展示されていて、今回の学習でそのことを思い出したので機会があれば小学生以来久しぶりに行ってみたいと思いました。

②熊谷高校　地学部の2名

熊谷の至る所に熊谷空襲の跡が残っていたことに驚きを覚えました。そして、その跡を自分の足で巡ることでより実感できました。また、これらの戦跡を見て凄まじい当時の熊谷の様子が想像できました。そのような惨劇は二度と起こされるべきではないし、起こってきてほしくないと誰もが願っていると思います。そうするためには、これらの戦跡を将来の世代に伝え続けていくことが重要だと思いました。（西田）

熊谷空襲の戦跡巡りを通して、普段何気なく通っている場所で、何十年も昔にどんなに恐ろしく悲惨なことがあったのかを知り、今現在私たちが平和に暮らしていけている事がいかに大切か身をもって感じることができました。また、石上寺で涙ながらに空襲の被害について私たちに話してくださった住職の岡安さんの話を聞いているとき、戦争がどれほど多くの人を苦しめるのかと思いました。やはりこれから先は、世界で戦争や紛争をなくせるように様々な問題を解決していき、争いを生まないようにしていかなければならないと思いました。（加藤）

8月16日は星川で灯籠流しが行われます。

倉橋さんの講演会を終えて

栗原邦俊

私たち熊谷空襲を忘れない市民の会（以下「会」という。）は、2015年6月に発足以来、戦争・空襲の被害者として二度と戦争をしない、戦争に巻き込まれないなどの「非戦」の立場から、熊谷空襲の記録と次世代への継承を目指した活動をおこなってきた。

しかし、先の戦争は中国をはじめ東南アジア諸国への侵略と、ハワイの真珠湾攻撃から本格的に始まった。そうした国々に対しては、加害者の立場からの検討も必要ではないかとの意見も会の底流にはあった。そうした中「憲兵」であった父の「遺言」の実行を求め、かつ父親が戦争中憲兵としてどのような行為を行ったかについて、言わば「加害者」の立場から講演等の活動を行っている「倉橋綾子さん」の存在を昨年（2023年）12月31日付の朝日新聞の記事で知った。会として、倉橋さんに「講演」を依頼することとし、了承をいただき、「憲兵だった父の遺言と私―謝罪を伝える」と題しての講演会を5月24日に開催した。

ここで若干倉橋綾子さんのプロフィールを含めて紹介したい。倉橋さんは1947年群馬県に生まれる。早稲田大学卒業後都内で中学校教員を務めた。父親が病床に付し、亡くなる直前の1986年に同父から、戦争中に「憲兵」として従軍し、中国で行った行為に対して「詫びる旨の文言」を、死後墓に刻んでくれとの遺言を渡された。以後その遺言をどう実行するかの葛藤が始まった。そして、苦難を乗り越え遂に実現させたのだ。

・倉橋さんの取った行動等（講演及び著書を通じて）

「遺言」を託された倉橋さんは、父の死後、兄（二人）に相談したところ、兄たちも同じ「遺言」を託されていた。しかし、兄たちは戦時中のことで、兵に駆り出されている者たちは、上からの命令で大なり小なり戦闘行為を行ってきた。父だけが特別ではない。従って、父親が謝る必要などない。そんなことをしたら墓に入っている先祖や親族に申し訳ない。いずれ俺たちも同じ墓に入るので、入ったら先祖や親族に何を言われるかわからない。だから墓に刻むのは、絶対にダメだ。お前は死んだら嫁ぎ先の墓に入るのだから、俺たちに余計なことを言うな。と言われ取り付く島もなかった。

そうこうしているうち、月日がたち、倉橋さんは体調を崩して教職を辞することとなった。辞したら時間がたっぷりあり、父からの「遺言」とじっくり向き合えることとなった。反対していた兄二人も亡くなり、親族は叔父だけとなった。叔父にはお前がそこまで拘るなら自由にしろと言われた。そこで遺言を実行しようと決意、ただ墓でなく墓のそばに遺言と同じ文言の墓碑を建てることにした。建立まで12年を要した。

しかし、倉橋さんはそこで終わらなかった。いったい父は憲兵としてどんなことをしたのか、父が生前中、寝言で何かに怯えるようなことを発したりしていたことを思い出して、できる限り父の同僚や上司等に会って、聞き出そうと奮闘した。しかし倉橋さんは、父の生前中に憲兵としての行為等を聞き出せなかった。テレビ出演がきっかけで知り合った野田氏（精神病理学者）からの、何故生前中に聞き出せなかったのかとの問いが頭にあって、努力したが結局真相はわからなかった。それでも中国で何があったのか。父が書き留めた軍歴書を丹念に調べ父が中国黒竜江省石門子で任務に就いていたことが判明。以後3回同村を含めた中国への「贖罪の旅」を行って、父をはじめとした日本軍の過ちを謝罪した。これらのことを約1時間半にわたり淡々と講演された。

最後まで執拗に、父親から託された「遺言」の実行に家族や親族の反対や圧力にもめげずに奮闘されたことに頭が下がります。お生まれになった群馬の地は保守的な地区で、地域内からも色々圧力があったことと思います。これからもご健康に留意され一層のご健闘を祈ります。私たちももっと活動の場を広げなくてはと、個人的には思わされました。

・墓誌の全文

「旧軍隊勤務十二年八ヶ月、其間十年、在中国陸軍下級幹部（元憲兵准尉）として、天津、北京、山西省、運城、臨汾（原文はにすい）、旧満州、東寧、等の憲兵隊に勤務。侵略戦争に参加、中国人民に対し為したる行為は申し訳なく、只管（ひたすら）お詫び申し上げます。」

『追記』

一．倉橋綾子さんの講演の内容を詳しく知りたい方には、著書「憲兵だった父の遺したもの」（高文研）及び「永い影」（一粒書房）を紹介する。

二．倉橋綾子さんの墓碑建立までのいきさつ等は、6月5日付（2024年）毎日新聞「埼玉版」の『24色のペン』で隈元浩彦記者が書かれた記事を参照されたい。

（熊谷空襲を忘れない市民の会賛同者）

会計報告（2024/4/28～8/13）

収　入：	10.500	円
支　出：	23.910	円
残　高：	40.515	円

編集委員　吉田庄一、小川美穂子、米田主美
連絡先　吉田庄一（090-4957-9181）
メール　imajn241@gmail.com
HP http://www.peace-kumagaya.org